

• 0 1 2 3 4 5 6 7
1m JAPAN Trajma



13特
2132
66

66



92

覺

一病くろ仕越ヤア病中
二門牌をあんあおひ先風烈々若
喫煙用一年

一害人用ひ大切に相まう

月日

五二齋余嘗號

我次間歌喚奈何

醸唱章臺斷傷弓

貴射白發故鬢絲

瓶鑿卒生刀覩



意坡口題言



振鶯亭主人撰

嚮上承菴の外傳と著し維歲下富里乃

内典と編と明人の北里志平康記乃流

煙花畫本羲和く清の曼翁板橋記よ

效く斯玉橋記を作る彼舟亭の巨燁

かくて被嫁の洞房と相傳せ粵に擅售の火綿
賣に至り樂戸所德に莫懸南雲行
蓋金陵の五丁珠市の中牒名謁の樂籍溢る
因今は男樂女伎が號と呼べ掠ハ業種乃
不知ば業種ハ掠の味もば君よあふ事み
あるは甚だまづ手によ招れく扁舟の危きあれ

交起ひゆう門戸の鍵ハ尙印の眼をえとニ春歌
乃鶴迹今空へシ叶よ一夜乃夢と悽ま
きの宵流筆リよの上頭ともうほ足とも義碑
坊の富廟より備ふ壹坡口と云二勝さん
やつて拂ひよる出やがゆくハ陽室の

姫鬱散の酒、鳥彌の情、久絶ゆく事

如くもつらへかすんまぐもとがくま

やへ駄児の奇氣、イエととくひづる事

かく事やくまくまくとく倡門と出で於河

侍舟うやアモモモソムナモハ魯盤

きと家と、予近東北國と断く東

山乃一才切遊と是とを惟棚の間と情
所以の法から扶桑橋邊魚米市と
隱士室とを兼用帳場ら一處ぐ

門人關東宋寫

土橋意妓口 目次

第一回

眠屋半七於舟宿好
房園之感金籌段

第二回

美濃屋ニ勝晝置見通
宵泊于綠朝直

第三回

内塞茶屋有懸部屋姫
樂擴突出切文

東山意妓口

振鷺亭主人撰

第一回

花盛月隈亮と見りの久流湘
日夜東へ流去臨海橋乃人賣つ本長
金のむ達よひく 新城の河岸藏の下の
介之情奴の贅をうそ教りうされば義仲已に
の難痕のみ投すおとこ家淫暴亂の跡ふ達

と持て物也の爲とのまゝに詠、といふ故婦アサアスカ、まづこの湖東せらと、頃のよと勞く
勢ひよ座たるがのち、虜トガより取アヒり
信陵のねこをもとへ借と初々のほらで他乃
喫殿カクテイと、夜ひ猿那ヤマナの上酒カミサケ、
あきこまく、ハシナシの書有ふ辭と
碑ハタケ、陶器カマの高タカとすよ、雄岐カミガシの墓ツバメ、
其よばに東坡タカハシが赤壁セキベキの月ツキとす堂東山ドウドウサンの

あえと寝て、んはくしとぞせ後編と
そんじううしゆとしと、とまう後悔アフヘイあに立
ざれづくらすおとほふくと、月ツキと大オホの
氣エキほんの類タガと、まう肉アツの旭アキへ月ツキとて
う臘ウラヌ、實ヒツすや實ヒツへ、夜ヨう歌ウタを
あくとなゐのを、妓ジギの歌ウタと半ハーフれど、付
人ヒトと、下アッタあぐづアグヅめげメゲともあがきと
來アリあくアカルこととす、なみのよとものあり

ラヤサ助さんお出でなまへせんひにとくまぐ
詔おじかうおどりさんうながしまの川と
ゆります。トボクのまことと出でと一の富
山

はせすかくまつらひもくとも
時のむきりあせうよ養ひを
うきつをねむらへやうまつるを
もととて唐手。我あづみづく
ひきゆうとがまめのとくをとく

萬

文

文

あくべ
房事下タマハシトドキ金之禮カミノリアキ
トモトモトモトモ御ミもまの御ミセ下
ひのこのせんとくとくをのゆうよ
作トコれトコたせとくとくわくくわく
くのくわくくわくくわくくわく
勢セイくべせとくとくじとくとくを
ひきれせみわくのくとくとく

あらしよとまくかくへとわる
津えといすり自し ちくゆまほら
あまうと書てたゞいゆとあく 国 まく
ひの御 トヤトモアリテマシガミニテ
アラシヨドムシキナカニシタモヒテ
トモクニアセタカレル』 トアサエ
おもてあまうのこちちやうつす 院 さ
きぢに 田 あまうよとせし まき

らんむらは とくとくのうめくを
きのくにやのとーりとくそくと
ツサ うへひかんとんじゆ とくとくよ助
に まく 院 まく 院 まく 院 まく 院
ハト トモアラシ 二三がんくろく見け目サ
色くたんじゆ 嘉 す 通 ひよ 通 が な ま
か ゆ だ う ま し と み と と と と と と
唐 ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま
よ び び び び び び び び び び び び

神 ワアン こつらへる ぬト 神社 やまと お達
り うそたすく ひども サ さやうかうト
義の 神 もううまうと ワアン 田 市さん はまよ
焼ゆてせつせよ 神 やまびよウルト 道
モレお身ひが 田 ふイト 立うくとも まよひと 神
安 まんじゅうちくサ 田 こうよ まだ まうがち
えどきの 田 船組 いとうみの ひもうり ゆみ
ゆきと 田 神かみ

ゆきれて表うておもひのよきものぞ
のうきんあうてうるべーかくへ風とうつてせん
なれどよひうへぬゆききよこはりあんじうくさればぞく
やふきけのえと人づいたぬもおの年どく
りくあすやおまをが
野のやうとせあつて

は

連

因

の

用

ア

そとどうらうじたくあんぐじートか房うきかへみのあと
ひなうあるとえてもうまきう風とひうねくめうと
ぬくべぐうが、もうまきう風とひうねくめうと
もくちうきんとくじゆか

原

かんだん川

び

ま

く

まくの腰とくひにまくわせよ

原

マイトあ

ヌ

を

ひで連うれゆくへ

原

病氣

ア

リ

ク

二三百きりとくひとくひとくひとくひとくひとくひとく

原

あまの繩

ア

マ

ク

二百のは無むらうとく井いのむらう何よ

原

う

ク

マ

ク

うがるんがつゆまくはくとくわざう
可そとくうまくはくとくわざうひとくわ
わざうじとくわづとくまんの事よとあ
くゆとくわづとくまんの事よとあ

原

ア

マ

ク

ク

本多忠重の切妻とくとくの
事もあらわす。忠重は、
いとまことに、忠重の妻の
ことかくらういふ御内侍をよ
トやくみる。忠重はまた、
である。忠重は、

宇也あと二箇月で
やがてアラルればゆきか
の見事にやみア
△うそせても内へ内へ
らでつまひの事有るのうせ
あまくすりの事やうめ事どもや
んと育れど子のうがまひをうんをう
ぐはりあきらめられぬうううう
くがのうづくまひのゆき
うめ事どもや

卷二

ここの
あらう
こがき

卷之三

おとこ
みのわ

女
そりのりんのらす
ちんとこびてゆき

十二のうれしけが、
蠍室のうりやまゆ
は、
機の頭をふくらむ。
トヨタモヒテ、
さんぐへりす
つて、
わくとく、
コキ、
まくは、
アリ、
枕のゆきひもだ

まじめに思ひてゐる

卷之三

中
國
文
字

卷之二

卷之三

卷之三

中
國

卷之三

任

卷之二

御守ひきもひき

卷之三

卷之三

とすも其事年、うぐりのゆうよひをうる
やうよ、トゲトと身のゆづみのじきの
まもとくとさりぬくもれねらむとす
ゆふねへやどりふとまのあつて、
くまと揃ふとゆかのうへよどとせす

ぞ去うわこねゆあがむかまひとめす
春うぶをこまわれ往むだとものこくら
む休星まほうぎ去ゆまほうぎの昔古

すサ夏サ見うねうねうねのひしよまに
ゆれくゑのうめうめうめとしげねすまに
ほくゑのうめうめうめうめうめうめ
とゑくゑくゑくゑくゑくゑくゑくゑくゑ
るうめうめうめうめうめうめうめうめ
王モ見うねうめうめうめうめうめうめうめ
あくえうめうめうめうめうめうめうめうめ
内モのうめうめうめうめうめうめうめうめ
をたれまばのうめうめうめうめうめうめ

ト高ツく
すう事

云

あきじが福

まつり

と

おもて

よ

ト高ツく
すう事

云

あきじが福

まつり

と

おもて

よ

めさんとふとせみうづく福

云

且ね

へ

まご酒ねまちうれ福

云

娘

やく

りまみの拂ぬけかよどぐかきくせまみ

云

娘

やく

ざらふのよ

云

娘

やく

ほりかくらう角かくくはくをくらはるはく

タニヒト伴ひきでやせばはるか乃ま車の屋

へつまの轍しきがゆくとまほまぞ考かてよすれは

あの是さらけとひよ若相あいくらをくらふる

中なかとゆうまと云モシ中なかと一ワトあうづく

石いしくふかふとみむへう日ひのくがわとぞと

ゆくやくア眉まゆとそととみうくとみびと

かちまみみとこくまきみの定さだみがこむ

もんごとねくとみせじみとみみとひまき

ハ福ハシヒニ一ツだけ仲良しとあつてアセバと
う一食くらひ前へくらちよきのせあが安井
ちをとすを仲良しトシテキタマク **女** 結ハイナミとえ
三つともうかねに上病氣でもありますうもさ
いたぐまつりません床に侍つゝありますと
接 イヤあらうこのト後をちうどどうとうふふど
らふ云は物へ一ツ引ぬよけでやへつけどもひ
と争く箱とまゆの盆 **夏** おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

かせへ **伴** 代保なることを一ツでボシハイ内キますハ
本さんもまたおへつひを出ませんもへこんどん
へきひのとくのとくのとくのとくのとくのとくの
船 フレモ黒あつてうねこ **母** ラヤゼウラモキ
よ トネホミハシミ **舟** 奈々舟の舟の舟の舟の舟
三うざつまく出られぬけとよへときやのあに車ますま
車ますひへとおととおととおととおととおととおとと
をとろてすまづしこうへハモトセモセモセモセモ
のようけ舟がみくに舟がりあてもうあくまをじぐきとあく
とをりつてやうと見んじうがあつやこうやとみうてると舟
つくすま一まのうづみとこんきうみまうくれるなり

ごそんが
一氣うまい
やうだい
むまび天
神みやさ
をうさび
なう

景
そよぎやうそくとけさごんきよめ
どうもゆのとくはなはりとく
きのこくまうめあらわせとく
三
まくねるまくえ

往々もあらんぢうらうとひづる
ある日わざわざおきゆを詰めよ
がれとあまくはりとせせやうは

さかのうへんへんじよ

足寄

二うもむまにうれいとあらうと
やあらうとあらうとあらうとあらうと
おもとあらうとあらうとあらうとあらうと
もあらうとあらうとあらうとあらうとあらうと

口きくまとひもたらよ

三

ホニホニとさん

ハ初會うそりと
スアマク苦勞と難とさんとさんとさん
きとすうと傳令とど星宿とひ伏せやうと
せひとひすうとこんとくとくとくとくとく
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とて度ども其の事はあつたが爲めに内
か二 真がたててゐる行はれぬやうだ
あくまゝがまひそ 緒ともあきんがりつと安
あらうとまつが早ゆとの常とやつて何とす
はゆく薄ひはト足あらうのよことと勢をなす
かまどたぬがてのゆゑ出でや 薄ホン
ちあらさぐとまつてつが勢ゆのつまきとがとを
わづひよのう 両手をあくせむのとひよ
袖をひきひき行ふう

たんとある西初年の御事といふとトトモと
あ方の御ふへとあ
ますとあわこらる **書** モシ 狹と一りへおえうせ
トだくとまよと桂へおもとび紙の
里角とおれ桂うてかく松とす **桂** けよとくがふ
通ひのまわうとすまつ **書** モシ まと
なむ **桂** なむとしのひを出と **女** えゆよび
とす **女** こくとおんとくとくと
いであ葉よ **女** ハイー 聞きり **桂** け葉むか
けまなみくねちとすまんのまよ **書** え

がてすまじゆく桂 **桂** さきう **モ** とくとく
せうへやまの日ゆくあまの鷹う **モ** くみうて
毛とれがみう **モ** 切をま **桂** まくとく
あくとえうこのゆうは筆 **モ** あごせくせん
くふの筆とまきとめ **桂** 神ふと風と
のとくよまくおひてねすり
えきとくらうゆのうじよじよじよ

種 種 あらへてもあらへて どくふともとくふとも
ちよ 吉 かのじよひゆく かくまく かくまく かくまく
タマのやうな下アラシト てとづか、ひくと くわいのきやうだ タ
くわいのきやうだ タ 種 事 事
タマのチキアラシト あくまく 下アラシト あくまく あくまく あくまく
あくまく あくまく あくまく あくまく あくまく あくまく あくまく あくまく
アリト もシテ もののとつともまの 種 アリト もシテ もののとつともまの
ゆうゆうトキセカラトチヨ トキセカラトチヨ

おはとくをヨレハモ^コトナリテアリマス
ロトトヒトカシガビトアタマヘ再^{メカウ}
ナムニ城^シヒシロヒテ搜^シの事^シ通^シナキヨ
不^シ用^ヒハジセ^シト^カ 拙^シ執^{ハシ}ねけうへつ^シ、^シが^ア
ハ^シの半^ハヒド^シ、^シハ^シの^シも^シよ^シト^シ
ア^シジ^シト^シハ^シの^シも^シセ^シ 拙^シヤ^シハ^シア^シレ^シ
^カト^シア^シレ^シハ^シは^シハ^シア^シレ^シ、^シハ^シア^シレ^シ
ヨ^シシ^シハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ、^シハ^シア^シレ^シ

ヲ^シテ^シセ^ル 吉^シ 不^シヤ^シレ^シ 拙^シ ハ^シア^シレ^シ
ハ^シ 拙^シ ハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ、^シハ^シア^シレ^シ
ア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ 拙^シ 四^シ角^カア^シレ^シ
ア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ 拙^シ 五^シ角^カア^シレ^シ
ア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ 拙^シ 六^シ角^カア^シレ^シ
ア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ 拙^シ 七^シ角^カア^シレ^シ
ア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ 拙^シ 八^シ角^カア^シレ^シ
ア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ 拙^シ 九^シ角^カア^シレ^シ
ア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シト^シハ^シア^シレ^シ 拙^シ 十^シ角^カア^シレ^シ

福
ヨリヤノトモトマツルサシテアリ乃
キテハ神ニセキムニ安カヘタヒトサキ
ヒヨコヨ
桂皮
足が氣りシヒ
モニ
ガキニ種子イ
桂皮
モニ
萬金
カハニ葉ニシテアリハジラカシギ
桂

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

アホウサカシキトモ
アホウサカシキトモ

مکتبہ ملیٹری ایجنسی
کراچی

かくせうやあらふやとを參るまへてくせもすきぬ
寫しゆうじゆうとくのとくにまわる參るまへてくせもすきぬ
ゆゑ空くわらのとくにまわる參るまへてくせもすきぬ
えを紙にひくのあひてひでをさへ天大天小天
物の二八船とうじゆましまの松葉まつばやくと
山車すくは中の上方奉を應えむとけよ東山
船かくわら店をしあう舟かくわら船め
船をすくあんぐりよめ

のまづじこひせんのじとびせんの行がん
トトかみかみくまくまうてろう 〔行〕ア モシロ
あそぶに立たるにゆきよから 〔娘〕ア モシロ
せのねぐらじかくすくじゆく 〔母〕ア モシロ
トよでくわ 〔母〕モシロ
おどりす 〔母〕モシロ
事務機会をもとまうとまじとくまう 〔母〕モシロ
通勤時間の間もまうとまじとくまう 〔母〕モシロ
つあくまうとまじとくまう 〔母〕モシロ
すまつてまうとまじとくまう 〔母〕モシロ
おれとまうとまじとくまう 〔母〕モシロ
おれとまうとまじとくまう 〔母〕モシロ

言 モシ二三日の口ふ一葉の葉 〔口〕モシ
いわとく 〔花〕ア あくまくまくまくまくまくまくまく
寝床のゆべ 〔花〕ア あくまくまくまくまくまくまくまくまく
うくあくせじ床 〔シノハタニキリ〕用ふと
あくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
雪 〔シノハタニキリ〕用ふと
はまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
ほまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく 〔モシ
絶えとくま 〔モシ〕見事にそれられます
花 〔モシ〕さくえ
花 〔モシ〕さくえ

そんやあやまつわよしのいづみせびんの
こもとへりせりといよこ務さんす筆を揃
てあるつるこんやあらめぬとんびトニスメジ
リスモリスモリスモリスモリセキ
ス車の口の車の口とをまのくと
門へかどりた橋の町へひどりたチヤチヤ
佐賀
の流アマツ▲二三の花あらわで見るが一さの床
つまむれく花はくとをあき
う見葉う見
やんよこよよおねどそれこなうんが○、いのの床六
まやせまや合

えふやあまとヰなよひのうなまくとんび二の
じよの秋にあまくとんび二の秋にあまくとんび三の
うせふ三の秋のうねけあまくとんび二の秋
うねくとんびあまくとんびあまくとんび一の秋
あまくとんびあまくとんびあまくとんび二の秋
あまくとんびあまくとんび三の秋

トはんごして庶とぞりへそひのあつてスミケ
事事あるもせりゆくがはるまへどもひぬう
ぢううみか
原 もじトキツサ
えふらむ
ははきゆでかうのアマハシモセキヤ
すよじとよじとせひよトソ西
サヨリ **女** ほん原
をくらまことびらさん **女** 二うさん中
者とはおゆーとくやトアシキアリモアサ者と
御見すわね也
木 カハハヒカベカヒタリ
あくううわめよリハセリハれ福ガ

「**原** もらんわうへとくひま
ぐれ西まへよせやへはれのうへ
あめとれふせ福ルもやがく福ルまへ
カハハヒカベカヒタリ
やとく福ル **原** からくまのくのひに
すよく共トく寢トかじめがくじら
そくよもあくさくせじうぬが福ル福ル
まへとくんうとくくとせりくそせんカ

つてからまことに此處をんぞれもくらへるゝ事はうりあせど乃の
わざとくづけたまつてよかうつきにふれひへ、かきえんはちやうくさふ
くげあひだくいかゆめりそがづらふつきて
ハマ
ボラン
リ

是の事は
ガタリサリ

卷之四

うるさい
廊下の音と
静かな室
ちの音と
かの音の
うちの音

ふもつて坐あとすと一宿すかとゆへ床と
よしゆるをあやひとらうちよへゆくはも
れそしつくさのわがいのまちあらあてども
やうらせりゆくはーもー星期の時
いきるよほもーそらやつませつま
トのじぐくとまと屋敷をうけて山日向に
こむこうへおもよのととへておもせあらむ **中** いとぎ
せとくかうひととてとひふらわくわ
うきとひととせとめいねむひへん **サ** うき

いやねやーせんよーりふたは十日かとばくの
みゆきうきうか **娘** やあせんとせんとおきみ
あがれとくま **娘** あらかよ **娘** あらかよ
くらかよ **娘** あらかよ **娘** あらかよ **娘** あらかよ
つむかひくわ **娘** あらかよ **娘** あらかよ **娘** あらかよ
すくじくよちひくわ **娘** セウ湯の井 **娘** あらかよ
あじくわ **娘** あらかよ **娘** あらかよ **娘** あらかよ
あらかよ **娘** あらかよ **娘** あらかよ **娘** あらかよ

とおもひやせぬせむるをなすとす
二
よの通しのゆきとくわゆがひよ
つゆうゆのまきくる娘むすめがんばれあわよえ
よは氣きじよア也ヤとひつてもよ浦うら櫛くし
かくちすすあれどうゆくひよとを
かくちすすあれどうゆくひよとを
めうめうとみ若わか娘むすめあいだりうれ
げくやどむれせうごのううくま
めうめうとみ若わか娘むすめあいだりうれ
めうめうとみ若わか娘むすめあいだりうれ

アシカヒロトモニ
サケの烟酒へまつひのあどり
かくと行かんぞ
ふそらざ今ま
せんじんほんば
うそきあまくね
もももももももも
が是がいの君や
じよよよよよよ
ごくごくあああ
アシカヒロトモニ
サケの烟酒へまつひのあどり
かくと行かんぞ
ふそらざ今ま
せんじんほんば
うそきあまくね
ももももももももも
が是がいの君や
じよよよよよよ
ごくごくあああ

物をへりてあまうとくに復のころ五
井アシのまつりかみの事からてすこひ
マ内金マカニもれまくとよまととくよめ
うせぐ世の中他不^{トト}のなつも時タメをえん
えとくとどあつまざねぐまの取くと
わんとへくとやれくのよア市場の向
川カワ月あーの鰐アマモとくあがくのま
まつるのあうごくとばま^トは

アリヒテモキラキナムアリハリ松町の
うきとくはりけのうふ忙とあひるの
あうがくめとくとくとくとくとくとくとく
じよとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あてまきのひまのせんと出とよとよと
あてまきのひまのせんと出とよとよとよと
もととわくとくとくとくとくとくとくとくとく
やぶれとくとくとくとくとくとくとくとく

うきとまことの娘ニ勝さん一女の御子セキヌ
三 ほせみくわめむよ

〔深〕

たのちねへ

ゆきかあすりとてくわめむよ

〔深〕

たのちねへ

トシカムシカムシだよ わどかくやまとくづく
そばうはまよとてくわめむよ

〔深〕

たのちねへ

娘 まつじごひよこ

〔深〕

たのちねへ

もひねき出ましらよ

〔深〕

たのちねへ

かあぢくテナンテヰキミキとあそびく

〔深〕

たのちねへ

モキシテアラタモヒテアラタモハシト全
ざくとゆくをふがましにねうをうだつて
てうとうとくけうらうとくとくとくとくとく
いとびのくあそくあそくあそくあそくあそく
いとびのくあそくあそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそくあそくあそくあそく

〔深〕

たのちねへ

いとびのくあそくあそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそくあそくあそくあそく

原
福島
あまの舟の
たまご

通鑑

翠東尖識

の急切の心を生み出すよと家業の事と割
合の済みで、神もさうのせりと奉施
の役を乞ふて、御前浦へやりて、義理と
理屈と腹のあつま斗すがゆのく薄いが足
あらびて勝へどもしてはまつて、かくと
毫毛もぬる二ノ角法の如きありて、あら
情へれてはまつて舟宿（まひやま）に泊

爰々が往來運の手をかへせ是れを備る友三徳も達
察さうとどくらかすく年事とぬじゆにゆる之
誠に寧よとぞりありぬ而しに松附めうらむとびて
やの愛おし夫情をば逃ふむむしやヌ客うり贈情
通趣儀志の復ふとく後編の戒とどく

深川大全

振鷺先生作
全五冊

芳原遊仙窟

一典 同作

傾城人相鏡

同作
一典

白無垢芳町櫻

同作
一典

